

| | |
|-------------|------------|
| 群 教 セ | E04 - 06 |
| | 平 23. 244集 |

平成23年度長期社会体験研修報告書

研修先：有限会社武井農園

長期社会体験研修員 糸井 秋雄

I 武井農園における研修について

1 研修内容

(1) 研修先の概要

武井農園は、平成10年に農業生産法人として設立され、約5000羽の放牧採卵鶏と2.5アールでのキウイフルーツ栽培、漬け物などの農産加工、提携農家や市場より仕入れた青果物の小売り販売などを複合的に行う6次産業化（1次×2次×3次＝6次産業）された企業である。代表取締役である武井尚一氏は農業における幅広い見識と人脈をもち、元群馬県農業法人協会会長・日本農業法人協会副会長の要職にある。

(2) 主な研修内容

武井社長の幅広い人脈と優れた見識による充実した研修計画により、農業経営の実際を理解することを目的とし、先進的な農業経営体での研修をはじめ農業関係機関での研修まで、幅広く組み入れた内容となっている。これらは1年という限られた期間の中で農業に関する様々な知識や技術、県内農業の実情を最大限に得ることができるよう十分に配慮され構成された研修である。以下は研修の概要である。

① (有)武井農園での研修【通年】

養鶏・キウイフルーツ栽培・農産加工・青果物出荷を中心に武井農園における業務全般を行った（図1、図2、図3）。



図1 鶏舎の様子



図2 キウイフルーツ圃場



図3 農産加工品

② 農業法人・優良農家での研修

ア (有)ロマンチックデーリーファーム(酪農)【4月18～22日】

搾乳牛500頭をはじめ、乾乳牛・育成牛あわせて1000頭規模、日量20トンの搾乳を企業的に経営している日本有数の酪農家である。

研修では、定期検診見学・飼養管理・哺育管理・搾乳作業、スモール市場の視察などを行った（図4）。

イ (有)三輪農園(米麦)

【5月18・19日／6月27～7月1日／10月11～14日】

前橋市南部の平野という立地条件を生かし、雇用を図りながら、およそ60ヘクタール規模の米麦二毛作とミツバの水耕栽培を組み合わせた大規模経営の法人企業であり、外食産業などへの販売を広く行っている。



図4 牛舎の様子

5月は水稻の播種（乾田直播き含む）と水田管理（除草剤と肥料の散布）、6月は田植えを行い、10月は稲刈り及び出荷調整作業を行った（図5）。

ウ 加部農園(タマネギ・下仁田ネギ・ニラ)【6月20～24日】

家族経営で、およそ3ヘクタール規模の畑作複合栽培を行っている農家である。適地適作をモットーに、減農薬・有機特別栽培に取り組み、地域の雇用を図りながら収益を上げている。

ここでの研修期間はタマネギの収穫時期であったため、研修期間の一週間を通して徹底して収穫作業を行った（図6）。

エ 北村農園(イチゴ)【7月6日・7日／9月10・12日／1月24日】

典型的な家族経営の農家である。イチゴは市場出荷せず、インショップを中心とした直接販売により経営を展開している。

本農家へは年間三回の研修を実施した。7月は苗取り、9月は植え付け、1月は収穫作業を行った（図7）。

オ (有)妙義産業(舞茸・椎茸・木耳)【9月26～30日】

妙義地区という山間地の特色を生かし、菌床キノコ中心の生産を行い、地域の雇用を図りながら地元密着型の経営を行っている。

ここでは、舞茸栽培の玉作り（菌床）から接種、収穫まで一連の作業と椎茸の収穫作業を行った（図8）。

カ (有)宮城主豚センター(養豚)【2月6～10日】

母豚2000頭規模の養豚を企業的に運営し地域の雇用を図りながら社会に貢献している大規模経営体である。

ここでの研修は、豚舎管理・肥育管理作業を中心に行った。また食肉卸業者の見学や、飼料会社とのディスカッションも行った。

③ 農業関係機関での研修

ア 群馬県食品安全局【8月3・4・31日】

- ・現場理解促進セミナーへの参加
- ・群馬県衛生環境研究所の見学（図9）

イ 日本郵政金融公庫農林水産事業部

融資の実態と農業経営体の育成振興策などの研修を行った。

ウ 桐生青果市場株式会社【10月17～28日】

市場内で農産物の仕分けや競りの準備、事務処理を行った。

④ その他の研修

ア JGAP指導員基礎研修(資格取得)【11月24・25日】

JGAPとは農業生産にかかわる行程を基準化した規格であり、作業記録を伴う日々の自己点検によって農業生産工程や経営の継続的な改善をしながら、適切で安全な農場管理に取り組むことを目的としたものである。講習により資格を取得した。

イ 農業法人全国秋期セミナー【11月29・30日】

岩手、宮城、福島の前被災三県と平成22年の口蹄疫で被害を受けた宮城県の農家によるパネルディスカッションへ参加した。

ウ 群馬県農業法人セミナー【12月5日】

自社生産の卵、加工品などを販売する直売所「たまご庵」を経営する、株式会社ココファーム会長松岡義博氏の講演会及び懇談会に参加した。



図5 直播き栽培の様子



図6 タマネギの収穫作業



図7 イチゴ苗の様子



図8 菌床舞茸の様子



図9 放射線測定器

2 研修成果

(1) 武井農園での研修

主となる研修先の武井農園では、「利益の上がる経営」「事業の拡大」「雇用の創出」を掲げ会社を経営している。複合経営を行うことで、取引先や消費者の細かいニーズへの対応、高品質で特色ある農産物の取り扱い、リピーターの獲得など、販路拡大につなげる様々な経営戦略について学ぶことができた。また、情報収集、マスコミの利用、マーケティング、シビアなコスト管理、価格決定の判断など従来の農業経営であまり注目されていなかった部分に視点をあてるなど、先進的な取り組みの重要性についても学ぶことができた。

このように、時代に即応した多角的な農業経営を学んだことで、栽培分野の農業科目にも経営的な視点を取り入れるきっかけができた。

(2) 農業法人・優良農家での研修

① 農業法人(企業経営)

今回研修させていただいた農業法人は、どれも県内有数の売り上げを誇っている企業経営体である。各事業所ごとに、商品性や需給状況、資本力、労務管理、生産拠点の立地環境など、企業原理を農業経営に持ち込み、独自の発想力で戦略的に事業を展開していた。

社団法人日本農業法人協会によると、農業経営の法人化の利点は、①経営の円滑な継承、②経営管理能力や資金調達能力、対外信用力の向上、③雇用労働関係の明確化や労災保険などの適用による農業従事者の福利厚生の実現、④新規就農者の確保が容易の四つが挙げられている。このように農業法人は、いわゆるビジネスとして農業を行う場合、利点の多い経営形態の一つであることを学んだ。

また、一方で、食の安全性、食糧自給率の低下、高齢化や低収入による担い手不足、荒廃遊休地の増加、原油高騰、TPP問題など、食料・農業・農村を取り巻く問題が山積している。同時にこれらの問題を打破すべく様々な企業努力をしていることを知った。例えば、徹底的なコスト管理や独自の販路確立、消費者に安全な農産物を供給できるようJGAP認証を取得したり、安心と信頼を得るために農園見学や消費者との交流会などの取り組みが挙げられる。

これら農業を取り巻く諸問題の解決は生産現場だけでなく、学校現場での農業教育でも取り上げていかなければならない喫緊の課題であると感じた。例えば、食と農の両面を取り入れた授業を展開し、幅広い視点から農業の重要性や必要性を考えさせたり、6次産業化まで視野を広げることで、農業を取り巻く諸課題の解決に向けて広く考えていく授業を展開することの必要性を感じた。

② 優良農家(家族経営)

現在我が国の農業経営体は、生活の延長線上で営農が行われている家族経営が大半を占めている。家族経営は、家族が労務の中心となり、経営と生活の区別が曖昧になるケースが多い。また、時代の変遷との兼ね合いにより継承が難しく、大半が後継者を育成しないか、することが困難な状況である。しかし今回研修させていただいた農家は、上記に挙げた営農方式を利点とし、拡大路線型の農業よりも、今できる範囲内の「楽しむ農業」を実践している。そこで栽培された農産物は地元での評価は当然のこと、全国的な広がりを見せ多くのファンから根強い支持を集めている。

研修先で農家の方と作業を行うなか、「大きくなりすぎると生産者として本来の思いではなくなる」「自分の今できる範囲で本当にいいものを作りたい」という言葉がたいへん印象に残っている。営農を通して、社会に貢献しながら生活を楽しむ農業も一つの経営形態であることをあらためて実感し大変考えさせられる新たな視点を得ることができた。このことは、本研修で企業経営と家族経営の双方を俯瞰できたからこそ見えてきた視点であり、学校現場で実際の農業教育に反映させる必要性と実現の可能性を見出すことができた。

(3) 農業関係機関での研修より

① 群馬県食品安全局

県民が日常購入する食品の安全性のチェックや安全表示などと共に、行政側が基軸となって「ぐんま食育こころプラン」などの食農教育を推進している実態をはじめて知った(次項図10)。食農教育

は農業高校でも言葉としてはよく耳にしていたが、食品安全局と連携することでより充実した教育が行えるのではないかと感じた。

② 日本郵政金融公庫農林水産事業部

農業金融の中で融資を受け持ち、あらゆる経営体を資金面や経営指導などでサポートしている機関であることを本研修を通してはじめて知ることができた（図11）。融資の実態と農業経営体の育成振興策が、社会状況や経済状況、政局などをふまえて行われており、法人化などの信用による継続的な経営が重要であること実感することができた。

③ 桐生青果市場株式会社

農産物の価格形成と物流、農業経営においての有利出荷、需給状況、商品性、出荷時期、量などの経営要素を市場機能の現場を通して学ぶことで、より実感をもって理解できた（図12）。

④ 農業関係機関での研修を通して

農業経営をサポートする立場の視点で農業を見たとき、農業関係機関は、農家と消費者、農家と行政をつなぐ役割を担っており、その重要性を実感した。これらの機関は農家との信頼関係に基づいて事業を展開しており、農家としても関係機関は農業経営を展開するなかで重要な位置を占めていることを知った。

これら農業と行政、金融、市場における農産物の価格形成機能や流通のかかわりは、農業教育であり触れられていない部分であるが、農業経営を左右する重要な要素である。このことは授業を通して生徒に伝えていく必要があると強く実感した。



図10 食農教育パンフレット



図11 融資パンフレット



図12 桐生青果市場

II 学校教育での活用について

以下は研修先における研修成果の中から1つ取り上げ、学校教育での活用について具体的に記述したものである。

1 主題

科目「農業経営」において経営の実際をとらえさせる指導の工夫 －企業経営と家族経営での農業研修を通して－

2 主題設定の理由

新高等学校学習指導要領解説農業編では「農業経営の課題の探究に主体的に取り組ませ、経営の改善に関する課題を解決しようとする実践的な態度を身に付けさせる」とある。また今回は、多くの優良農家において実務研修を行い、農業経営の実態について経験するなかで、農業は「企業経営」と「家族経営」に大別されており、それぞれ経営者の理念の基に経営が行われていることを知った。また、経営の形について双方に長短があり課題も存在していることも知った。以上のことより、農業をビジネスとしてとらえたとき、農業が抱える特有の状況（現状）を多面的に考え分析することは、経営の改善を実践的に身に付けさせいく上で重要である。科目「農業経営」の学習をはじめ、今後の農業教

育にとって特に留意する内容でもあり、実際の現場にて研修を行ってきた長期社会体験研修ならではの視点を取り入れることにより、経営的内容について具体的で実感のもてる効果的な授業が構成できると考えている。

本県の農業教育においては農業の経営的側面について、実際の学校現場ではあまり取り挙げていない状況にある。例えば、企業経営と家族経営の存在は学ぶが、具体的な事例に乏しい授業展開となっている。生徒の興味・関心を高め専門分野として追究し、農業の担い手としての成長につなげていくには課題が多く、効果的な教育成果が見通せない現状があると考えている。農業教育が、実験や実習など実際の体験学習を重視する観点から考えると改善や充実が急務の分野である。

そこで、科目「農業経営」において、今回の長期社会体験研修の視点を取り入れた単元計画を作成する。これにより農業経営における経営と生産の実際をとらえ、その成果や課題より経営バランスの重要性を考えることにつなげることで、経営の改善に関する課題を解決しようとする実践的な態度を育成できるのではないかと考える。

3 活用内容

(1) 基本的な考え方

① 農業経営の学習にあたって

新高等学校学習指導要領解説農業編第10節農業経営には「農業経営」の学習にあたっては、「農業の動向や農業経営の役割など、農業経営の現状や今日的な課題などについて関心をもたせ、農業経営を実践する楽しさを体験させ、農業経営に対する意欲を醸成することが大切である」とある。

② 経営の実際をとらえさせるとは

経営の実際をとらえさせるとは、実際の現場研修を行う中で見えてきた企業経営と家族経営の双方を俯瞰することである。県内で活躍する双方の農業経営者は、高度な生産技術と共に着実な農業経営と農業に対する高い意識をもち、それぞれの経営方針や経済環境によって経営のスタイルを決定している。

科目「農業経営」では、農業経営の設計と管理に必要な知識と技術について授業を展開するわけであるが、最も生徒が興味・関心のある、経営者のパーソナリティや資産を含めたそれぞれの経営状況などの具体的な部分までを授業に組み込むことで、農業経営への興味が高まるのではないかと考える。

そこで、今回の研修で得た農業経営体の事例を効果的に用いて「農業経営」の単元を作成する。

③ 授業に取り入れる観点

科目「農業経営」のうち経営の改善に関わる「農業経営の管理」を一単元として取り扱う。各指導項目について教科書を参考に指導内容を具体化する。内容について企業経営・家族経営の双方から見た視点と実際の事業所の特性など活用場面を設定する。以上により経営の改善を実践的に身に付けさせる単元とすることができると考える。この単元は農業科目全般において能動的に取り組む姿勢や作業実習における責任感の形成も期待でき、農業経営に対する関心も高めさせることができると考える。

(2) 単元指導計画

① 具体的に取り入れる単元

| | | | |
|------|--|-----|---------|
| 科目名 | 農業経営 | 対象 | 高等学校2年 |
| 時間 | 全24時間 | 単元名 | 農業経営の管理 |
| 指導目標 | 農業経営の主体、目標、経営組織、生産要素、共同組織について関心をもち、経営管理に意欲的に取り組もうとする実践的な能力を身につけている。 | | |
| ポイント | ○新学習指導要領の科目「農業経営」2の(2)に示されている内容を基本として構成した。 ○各指導項目に企業経営の視点と家族経営の視点及び活用の場面をあてはめた。 | | |

② 単元計画

| 単元 | 指導項目 (指導内容) | 時間 | 形態 | 活用の視点 | | 活用の場面 (具体の経営) |
|---------|--|----|-------------------|---|---|--|
| | | | | 企業経営 | 家族経営 | |
| 農業経営の管理 | ○農業経営の主体と目標 (1)様々な農業経営 (2)農業経営の目標 | 4 | 座学 | [題材：大規模] ・食糧供給源としての企業の役割 (例示) ・企業経営としての実際の目標 | [題材：特別栽培作物] ・差別化した農産物の扱い (例示) ・家族経営としての実際の目標 | 三輪農園の水稲と加部農園のタマネギを例に作目による経営目標(戦略)の違いを考える。 |
| | ○農業生産の要素 (1)生産と経営の要素 (2)生産要素の特性と利用 | 4 | 座学 | [題材：中山間地] ・立地環境の分析 ・農業資本の分析 (具体的な方法の例示) | [題材：作目の工夫] ・組み合わせの利用 ・年間労働配分の工夫 (具体的な方法の例示) | RDFの立地的特性や加部農園の作目展開を例に生産要素の実際を学ぶ。 |
| | ○農業経営組織の組み立て (1)農業経営組織 (2)経営部門の選択 (3)農業経営組織の成り立ちと組み立て | 6 | 座学 / G W | [題材：組織と経営] ・経営の複合化の意味 ・経営部門の採算性 ・単一経営によるスケールメリット (具体的な農場の説明とワークシート) | | 三輪農園の米麦、ミツハ [※] とRDFの牛乳を例に経営手法の差異について考える。 |
| | ○経営・協同組織 (1)農業と生産組織 (2)農業法人経営 | 4 | 座学 | [題材：法人化] ・経緯を具体的な例題で説明 (実際の言葉で説明) | [題材：非法人化] ・法人化しない理由 ・利点と欠点の説明 (実際の言葉で説明) | 武井農園と北村農園の経営形態を例に、法人化の目的と制度を学ぶ。 |
| | ○農業経営の管理 (1)経営者能力と管理運営 (2)経営の集約化 (3)経営の規模拡大 (4)ビジネスモデル | 6 | 座学 / G W | [題材：経営者] ・具体的な経営能力と戦略(例示) ・利益追求の重要性を具体的(例示) (実際の言葉で説明) | | ・規模拡大に向かわない意義(例示) (実際の言葉で説明) |
| | | 24 | | | | |

※GWは、グループワークの略。RDFは、(有)ロマンチックデーリーファーム(酪農)の略。

Ⅲ まとめ

1 研修先における研修について

今回の研修で改めて企業経営と家族経営に対する新しい視点を得ることができ、実際の現場での体験の重要性を実感させられた。また、多くの農業経営者との出会いは、今後の地域や産業界との連携を通じた教育活動を展開する上で本当に心強い見方を得た思いである。

2 学校教育での活用について

様々な農業経営の実務研修を行うことで農業教育に経営的な観点を取り入れる必要性ときっかけを得ることができた。また、今回得た経営的観点は、科目「農業経営」だけでなく、自分の担当科目である「作物」にも有効であることから、栽培系の他科目への普及についても取り組んでいきたい。

<参考文献>

- ・特定非営利活動法人日本GAP協会 『JGAP農場用管理点と適合基準青果物2011』(2011)
- ・群馬県高等学校学校教育研究会農業部会 『農業科目の評価方法等の工夫改善』(2007)

(担当指導主事 高橋 太郎)